

四百本目の点呼——数えられたものより、数えた道具のほうが先に壊れた

— 題名の **22.86** パーセント（**398** 編中 **91** 編）が否定の型である — だが最初の走査は **100・200・300** の三編を落とし、それはちょうど過去の点呼の回だった — 原因は体系ではなく、部分文字列一致という走査器の側の誤りである — [論文400]

山岸 勇輝 (Yuuki YAMAGISHI)

Yamagishi Complexity Torus Lab, Japan | 山岸勇輝ラボ

2026年9月

— *From thinking to syncing.* —

要旨

四百本目の点呼として、体系の題名を機械的に数えた。本稿が記録するのは数えた結果と、最初の走査が作り出した偽の模様である——意味ありげな三編の欠落は、体系の性質ではなく走査器のバグだった。新しい定理も法則も主張しない。第一に、**398** 編の題名のうち、否定の型を含むのは **91** 編、**22.86** パーセントである（第2節）。第二に、内訳は「ではない／ではなく」**79** 編、「無い／ない」**12** 編、「入っていない」**3** 編、「一つではない」**2** 編である（第2節）。第三に、直近の **379～399** では **6/21** 編、**28.57** パーセントで、全体より高い（第2節）。第四に、これが本稿の芯である。最初の走査は **398** 編のうち **395** 編しか読めず、落ちた三編がちょうど **100・200・300**——過去の点呼の回だった（第3節）。第五に、原因は「00_」という除外語が「**100_**」「**200_**」「**300_**」に部分文字列として当たっていたことである。直したら **398** 編すべてが読めた（第3節）。第六に、分離子は「模様が対象の側にあるか、道具の側にあるか」である（第5節）。

本稿の射程（射程注記）：新しい定理も法則も主張しない——数えているのは題名の綴りであって、内容の分類ではない。内容を分類しない——「否定の型の題名」と「主張が否定的な論文」は別である。本稿は前者だけを数える。定義に依存する——数えた正規表現をそのまま本文に書く。別の定義なら別の数になる。英語題名を数えない——日本語題名だけを対象とする。良し悪しを言わない——否定の型が多いことが良いとも悪いとも言わない。数を出すだけである。原因を断定しない——なぜこの型が多いかは主題ではない。型が多いという事実だけを記録する。既刊との関係：論文100・論文200・論文300は同じく点呼の回である——本稿はその四つ目にあたる。論文300は同根か別根かが判定できることを示した——ここでは同じ基準を、走査器の出す模様に向ける。論文391は代表値が代表していないことを示した——ここでは数え方が数える対象を作りかけた。論文397はもっともらしい説明が桁で外れていたことを示した——ここではもっともらしい模様が、道具のバグだった。加えたのは、398編の題名を機械的に数えたこと、内訳を四つの綴りに分けたこと、直近の波の密度が全体より高いことを示したこと、走査器のバグが作った偽の模様を、原因ごと記録したこと、分離子を「対象の側か、道具の側か」に置いたことである。

1. 記法と問い

設定：番号付きフォルダの日本語版から題名を取り出し、次の四つの綴りを数える。

- (a) ではない|ではなく (b) 入っていない
(c) 一つではない (d) は無い|が無い|しかない|られない|できない

対象は論文1から論文399まで。欠番47を除いて398編である。

観察 1.1

数えるのは綴りであって、意味ではない。「否定の型の題名」と「否定的な主張」は別——本稿は前者だけを数える。

観察 1.2

定義を先に書く。正規表現をそのまま本文に置いた——別の定義なら別の数になる。それを隠さない。

観察 1.3

走査器は、実測の分かっている題名で自分を試してから動かす。論文326「法則ではなく恒等式」・論文325「入っていない」——当たるはずの一件で試す（体系の規律そのもの）。

問い：体系の題名は、どれくらい否定の型をしているか。

2. 398 編のうち 91 編、22.86 パーセント

計算 2.1：綴りごとの件数（本稿で数え上げ）。

綴り	件数	全 398 編に対する割合
(a) ではない／ではなく	79	19.85 %
(d) は無い／が無い／しかない／られない／できない	12	3.02 %
(b) 入っていない	3	0.75 %
(c) 一つではない	2	0.50 %
合併（重複を除く）	91	22.86 %

観察 2.2

四編に一編近くが、題名で何かを否定している。22.86 パーセント——合併が各項の和 96 より小さいのは、重複があるからである。

観察 2.3

(a) だけで 79 編を占める。合併の 86.8 パーセント——型は一つに集中している。

観察 2.4

300 番台では 37 編が当たった。304 から 397 まで散らばっている——一時期に固まっているのではない。

観察 2.5

直近の 379～399 では 6/21 編、28.57 パーセント。全体の 22.86 パーセントより高い——この波で型が濃くなっている。

観察 2.6

全編ではない。91 < 398——「何でも当たる走査器」ではないことの確認である。

3. 最初の走査が、意味ありげな模様を作った

計算 3.1：走査器の二回の実行（本稿で計算）。

実行	読めた編	読めなかった編
一回目	395	100・200・300
二回目（修正後）	398	なし

観察 3.2

これが本稿の芯である。落ちた三編が、ちょうど過去の点呼の回だった——100・200・300。四百本目の点呼が、過去の点呼だけを見落とす——意味を読み取りたくなる模様である。

観察 3.3

一度は説明を思いついた。「点呼の回は否定の主張をしないから、走査器の型に合わないのだろう」——もっともらしく、そして誤りだった。

観察 3.4

原因は走査器の除外語だった。検算用フォルダを除くために「00_」を除外語に入れていた——それが「100_」「200_」「300_」に部分文字列として当たっていた。

観察 3.5

フォルダ名の先頭で判定するよう直したら、398 編すべてが読めた。読めなかった編は 0——模様は消えた。

観察 3.6

これは体系が既に名指している型である。層1の埋没——語がより長い語に埋もれる——ここでは番号が、より長い番号に埋もれた。

4. 数えた側の誤りは、数えられた側の性質に見える

観察 4.1

偽の模様は、無作為には見えなかった。三編とも点呼の回——398 編から三編を無作為に選んで三つとも点呼になる確率は $1/(398 \cdot 397 \cdot 396/6)$ 未満である。

観察 4.2

だから説明が先に出てきた。偶然とは思えないほど揃っている——揃っているのは、原因が一つだからであって、意味があるからではない。

観察 4.3

原因が一つなら、結果も揃う。「00_」が当たる番号は 100・200・300 の三つだけ——三桁の番号で、下二桁が 00 になるものである。

観察 4.4

そして点呼は 100 ごとに置かれている。二つの規則がたまたま同じ番号を選んだ——片方はフォルダ名の綴り、片方は体系の設計である。

観察 4.5

論文300 の基準で別根である。一方は文字列の一致が、一方は著者の設計が決める——同じ三つの番号を選んでも、根は違う。

観察 4.6

数値の一致は同根の証拠にならない。論文300 がそう書いている——その基準を、体系自身の走査結果に向けた回が本稿である。

5. 分離子：模様を対象の側にあるか、道具の側にあるか

観察 5.1

分離子——道具を直したときに模様が残るか、消えるか。

模様の出所	道具を直すと	例
対象の側	残る	否定の型 91 編
道具の側	消える	100・200・300 の欠落

観察 5.2

判定は一行の修正で済んだ。部分文字列一致を先頭一致に変える——片方は残り、片方は消えた。

観察 5.3

直す前に説明を書いていたら、体系の性質として残っていた。もっともらしい説明があった——もっともらしさは、検算の代わりにならない。

観察 5.4

分離子は動かせる。別の除外語を使えば、別の三編が落ちる——どの模様が出るかは、道具が決めている。

観察 5.5

正直に言えば——91 編も 22.86 パーセントも、本稿が定義した四つの綴りに対する数である。別の定義なら別の数になる——動かないのは、走査器を直したら三編の欠落が消えて、91 編は残ったことである。

観察 5.6

最後に一つ——点呼は、体系を測ると同時に、測る側を測る。四百本目の点呼で最初に見つかったのは、体系の性質ではなく走査器の誤りだった——それを消さずに書き残すことが、点呼の役目である。

6. 点呼と結び

1. 398 編を対象にした（第1節）：欠番 47 を除く。
2. 否定の型は 91 編（計算 2.1）：22.86 パーセント。
3. (a) だけで 79 編（観察 2.3）：合併の 86.8 パーセント。
4. 300 番台で 37 編（観察 2.4）：散らばっている。
5. 379～399 では 28.57 パーセント（観察 2.5）：全体より高い。
6. 一回目は 395 編しか読めなかった（計算 3.1）：落ちたのは $100 \cdot 200 \cdot 300$ 。
7. それは過去の点呼の回だった（観察 3.2）：意味を読みたくなる模様。
8. 原因は「00_」の部分文字列一致（観察 3.4）：道具の側。
9. 直したら 398 編すべて読めた（観察 3.5）：模様は消えた。
10. 層1の埋没と同じ型（観察 3.6）：番号がより長い番号に埋もれた。

結び：四百本目の点呼として、体系の題名を機械的に数えた——数えたのは綴りであって、意味ではない。398 編（論文1～399、欠番 47 を除く）のうち、否定の型を含む題名は 91 編、22.86 パーセントである——内訳は「ではない／ではなく」79 編、「は無い／が無い／しかない／られない／できない」12 編、「入っていない」3 編、「一つではない」2 編。合併が各項の和 96 より小さいのは重複があるからで、(a) だけで合併の 86.8 パーセ

ントを占める。300 番台では 37 編が 304 から 397 まで散らばっており、直近の 379～399 では 6/21 編、28.57 パーセントと全体より高い。そして 91 < 398 で、全編ではない——何でも当たる走査器ではないことの確認である。ところが、最初の走査は 398 編のうち 395 編しか読めなかった——落ちた三編が、ちょうど 100・200・300 だった。四百本目の点呼が、過去の点呼だけを見落とす。意味を読み取りたくなる模様である。実際、説明も思いついた——「点呼の回は否定の主張をしないから、走査器の型に合わないのだろう」。もっともらしく、そして誤りだった。原因は走査器の側にあった——検算用フォルダを除くために「00_」を除外語に入れており、それが「100_」「200_」「300_」に部分文字列として当たっていた。フォルダ名の先頭で判定するよう一行直したら、398 編すべてが読めて、読めなかった編は 0 になった。これは体系が既に名指している型である——層1の埋没、語がより長い語に埋もれる。ここでは番号が、より長い番号に埋もれた。偽の模様は、無作為には見えなかった——398 編から三編を無作為に選んで三つとも点呼になる確率は $1/(398 \cdot 397 \cdot 396/6)$ 未満である。揃っていたのは、原因が一つだからであって、意味があるからではない。「00_」が当たる番号は下二桁が 00 の三桁、つまり 100・200・300 の三つだけ。そして点呼は 100 ごとに置かれている——二つの規則がたまたま同じ番号を選んだ。論文300 の基準で別根であり、一方は文字列の一致が、一方は著者の設計が決める。数値の一致は同根の証拠にならない、という論文300 の基準を、体系自身の走査結果に向けた回が本稿である。分けているものは一つ——道具を直したときに模様が残るか、消えるか。判定は一行の修正で済み、否定の型 91 編は残り、三編の欠落は消えた。直す前に説明を書いていたら、体系の性質として残っていた。もっともらしさは、検算の代わりにならない。別の除外語を使えば別の三編が落ちる——どの模様が出るかは、道具が決めている。正直に言えば——91 編も 22.86 パーセントも、本稿が定義した四つの綴りに対する数であり、別の定義なら別の数になる。動かないのは、走査器を直したら三編の欠落が消えて、91 編は残ったことである。最後に一つ——点呼は、体系を測ると同時に、測る側を測る。四百本目の点呼で最初に見つけたのは、体系の性質ではなく走査器の誤りだった。それを消さずに書き残すことが、点呼の役目である。

参考文献

1. 山岸勇輝 (2025). 『王道の交差』 [論文100]. Zenodo. 10.5281/zenodo.21758864
2. 山岸勇輝 (2026). 『二百本目の点呼——体系を、体系自身のデータとして測る』 [論文200]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22108829
3. 山岸勇輝 (2026). 『三百本目の点呼——同根か別根かは、判定できる』 [論文300]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22171914
4. 山岸勇輝 (2026). 『虹の角度に、水滴の大きさは入っていない』 [論文325]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22209848
5. 山岸勇輝 (2026). 『二乗三乗の「法則」は、法則ではなく恒等式である』 [論文326]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22209992
6. 山岸勇輝 (2026). 『有義波高は、平均でもなければ最大でもない』 [論文391]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22699212
7. 山岸勇輝 (2026). 『「粒を細かくすれば強くなる」が破れるのは、理論強度に達したからではない』 [論文397]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22699316
8. 山岸勇輝 (2026). 『水を一滴も足さずに、湿度が 53.80 パーセントから 100 パーセントになる』 [論文399]. Zenodo. 10.5281/zenodo.22699338

— *From thinking to syncing.* —

山岸 勇輝 (Yuuki YAMAGISHI)

© 2026 Yamagishi Complexity Torus Lab, Japan · Licensed under Creative Commons Attribution 4.0 International (CC BY 4.0)